

COVID-19の5類引き下げと 大学生の社会的孤立・ ソーシャルサポート・ 孤独感の関係について

上田仁*

The Relationship between the Reclassification COVID-19's Category to Class 5 and Social Isolation, Social Support, and Loneliness among College Students

Jin UEDA*

The study examines whether the reclassification of COVID-19's category to Class 5 resulted in changes in social isolation, social support, and loneliness among college students. The study targeted 206 participants, conducting longitudinal surveys in May and August 2023. The results revealed an increase in social isolation after the reclassification to Class 5. However, there were no significant changes in loneliness and social support. Furthermore, individuals who were already socially isolated did not show significant changes in loneliness and social support. The study suggests the need to focus on societal factors and individual factors in prevention mental health issues.

key words: reclassification of COVID-19, social isolation, college students

問題と目的

COVID-19の流行拡大に伴い、2020年から対面での交流に制限が課された。Murayama et al.(2021)は、人との交流が客観的に少ない社会的孤立によって、人との交流が主観的に少ないと評価する孤独感が高まると整理し、孤独感がメンタルヘル스에悪影響を与えると指摘した。調査では、COVID-19流行直後に社会的孤立をした人は、そうでない人に比べてより孤独感が高いことを明らかにした。その後、感染症対策として対面自粛の要請は繰り返し行われ、2023年5月8日に感染症の段階が5類に引き下げられた。行動制限の自粛が解除され、社会的孤立は理論的に改善され、孤独感が軽減すると期待される。

* 愛知県庁

Aichi Prefectural Government, 3-1-2, Sannomaru,
Naka-ku, Nagoya city, Aichi 460-8501, Japan.
(jin_ueda@hotmail.com)

また、上田・松浦(2022)は孤独感とソーシャルサポート(Social Support: SS)の関連を指摘し、SSがあることで孤独感の解消につながることを示唆した。そこで、本研究は大学生を対象に、社会的孤立、孤独感、およびSSが5類引き下げ前後でどう変化したかを調査することを目的とする。

方法

調査時期 スクリーニング調査を2023年4月に、本調査を5月上旬(T1)、8月上旬から中旬(T2)に実施した。

調査手続き オンライン調査会社(Freeasy)に登録している4年制大学の学生を対象に調査を行った。まずスクリーニング調査を実施し、スクリーニング調査で抽出された大学生450人を対象に本調査を実施した。

スクリーニング調査 オンライン調査で教示文を精読しない努力の最小限を検出するInstructional Manipulation Check(IMC: Oppenheimer et al, 2009; 三浦・小林, 2015)を用い、正確に回答した人を本調査の対象とした。また、オンライン授業をどの程度受けているかを5件法(1.「0から20%」から5.「81から100%」)で尋ねた。

本調査の項目

(1) **対面での交流** 社会的孤立の程度を調べるため、直近1か月間で同じ大学の友人と対面で会った頻度を8件法(1.「会っていない」から8.「毎日会っている」)で尋ねた。

(2) **孤独感** 日本語版孤独感尺度(Igarashi, 2019)を用いた。直近1か月で「他の人から孤立していると感じることがありますか」や「自分に仲間付き合いがないと感じることがありますか」などを、3件法(1.「ほとんどない」から3.「よくある」)で尋ねた。

(3) **SS** 大学生用SS尺度(嶋, 1992)を用いた。直近1か月で同じ大学の友人について、「おしゃべりなどをして楽しい時間を過ごす」や「気持ちや感情をわかってもらえる」などの12項目を5件法(1.「あてはまらない」から5.「あてはまる」)で尋ねた。

倫理審査 著者が所属する機関に研究倫理審査委員会がないため、応用心理学研究倫理規定を確認し調査を行った。調査画面の最初に、研究目的、参加者の権利(回答の中断可、プライバシー保護)、データ使用・公表を説明し、同意した人だけが調査に回答をできるようにした。また、本研究で使用した尺度について、「対面での交流」は、友人と対面で会った頻度のみを聞いているため、心的な外傷は受けにくいと考えられ、「孤独感」と「SS」は、複数の先行研究で倫理審査の承認を受け(Igarashi, 2019; 上田・松浦, 2022)活用されているため、これらの使用による対象者への不利益は少ないと考えられる。

分析方法 ソフトウェアHAD(清水, 2016)を使用した。

結果

1回目の調査には360人が回答し、2回目には219人が回答

Table 1 記述統計

変数名	Time 1		Time 2		t 値	p 値	効果量
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
SS	3.465	1.106	3.549	1.040	1.703	.090	.119
対面での交流	5.636	2.083	5.364	2.143	2.569	.011	.179
孤独感	1.704	0.668	1.693	0.650	0.353	.724	.025

した。両調査に参加したのは206人で、平均年齢は20.5±1.4歳で、男性が86人、女性が120人だった。2023年4月のオンライン授業の開講割合は「0から20%」が153人、「21から40%」が26人、「41から60%」が13人、「61から80%」が4人、「81から100%」が10人だった。

それぞれの記述統計について、Table 1に示した。信頼性を示すα係数は、SSはT1で.960、T2で.959、孤独感はT1で.875、T2で.859と良好だった。5類引き下げによる得点変化を見るため5類前後での対応ありのt検定を行った。その結果、対面での交流の頻度が有意に下がった。さらに、5類引き下げ前に社会的孤立していた人たちのそれぞれの得点がどう変化したかを検討するため、対面での交流頻度の変化(対面変化)を基に5群に分けた。T1・T2で誰にも会っていない群(No Face to face : NF)、T1・T2でそれぞれ週1を基準にし、T1・T2でいずれも週1未満で会っている群(Less than once a week/Less than once a week : LL)、T1は週1未満だがT2は週1以上群(Less than once a week/More than once a week : LM)、T1は週1以上だがT2は週1未満群(ML)、T1・T2いずれも週1以上群(MM)とした。それらの群と時期を基に孤独感とSSそれぞれについて、2要因混合計画による分散分析を行った(Table 2)。その結果、いずれについても有意な交互作用は見られなかったが、対面変化による主効果では一部有意な主効果がみられた。多重比較についてはHolm法5%水準を基に行ったが、「5類引き下げ前に会うのが少なかった人たち」に焦点を当て比較した。孤独感の得点については、NFがML、MMよりも高く、SSの得点は、NFは他の群にすべて比べて低く、さらに、LLはML、MMに比べて低かった。

考 察

以上の結果から、COVID-19の5類引き下げに伴い大学生は同じ大学の友人との対面での交流が減少していることが明らかになった。特に、ML群が多数いたことから以前は週1回以上対面で交流をしていた多くの人々が週1未満に減少していた。また、5類前後で孤独感とSSの得点の有意な変化はみられなかった。したがって、自粛の要請が解除されても、社会的孤立が解消されるわけではなく、孤独感やSSに変化が生じるわけではないことが示された。

さらにNF群に焦点をあてると、孤独感が高く、SSも少ないことが明らかになった。この群に対する支援は急務である。小田中他(2020)は、社会的孤立の経験をするだけで孤独につながるわけではなく、個人と社会の要因の双方の影響

Table 2 対面変化による分散分析

		NF (n=18)	LL (n=12)	LM (n=7)	ML (n=149)	MM (n=20)	主効果		交互作用
							Time	対面変化	
SS	(T1)	1.616	2.778	3.417	3.696	3.837	0.570	28.184***	0.677
	(T2)	0.860	1.427	0.707	0.897	0.907			
孤独感	(T1)	1.843	2.590	3.571	3.789	3.863	1.336	6.215***	1.368
	(T2)	0.920	1.227	0.816	0.813	0.889			
		2.333	1.750	1.857	1.620	1.683			
		0.637	0.698	0.766	0.636	0.635			
		2.352	1.833	1.619	1.631	1.500			
		0.599	0.595	0.621	0.623	0.626			

***p<.001
上段：平均値、下段：標準偏差

があると指摘している。そのため、個人要因をも含めた支援策を考える必要がある。

引用文献

Igarashi, T.(2019). Development of the Japanese version of the three-item loneliness scale. *BMC Psychology*, 7, 20. <https://doi.org/10.1186/s40359-019-0285-0>

三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究 社会心理学研究, 31 (2), 1-12. https://doi.org/10.14966/jssp.31.1_1

Murayama, H., Okubo, R., & Tabuchi, T.(2021). Increase in Social Isolation during the COVID-19 Pandemic and Its Association with Mental Health: Findings from the JACSIS 2020 Study. *International journal of environmental research and public health*, 18 (16), 8238. <https://doi.org/10.3390/ijerph18168238>

小田中 悠・牛腸 政孝,・山下 智弘・吉川 侑輝・鳥越 信吾. 人間関係の希薄さに関する研究のレビュー：社会的孤立、孤独、SNSに注目して. 国立社会保障・人口問題研究所ディスカッションペーパーシリーズ. Retrieved November 1, 2023, from https://www.ipss.go.jp/publication/j/DP/dp2020_J01.pdf

Oppenheimer, D. M., Meyvis, T., & Davidenko, N.(2009). Instructional manipulation checks: Detecting satisficing to increase statistical power. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 867-872. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2009.03.009>

嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00003725159>

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

上田 仁・松浦 均 (2022). コロナ禍において大学生のソーシャルサポートは何と関連するのか？——2020年11月の調査から—— 応用心理学研究, 48, 36-37 https://doi.org/10.24651/oushinken.48.1_36

(受稿：2023.11.13；受理：2024.2.20)